

つながる子どもの育ちと学び

は じ め の  
い っ ぽ

もういっぽ

～保幼小連携、これで充実させよう～



令和6年12月

山口県乳幼児の育ちと学び支援センター

## はじめに

平成29年3月に改訂された、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において「幼児期からの発達と学びの連続性」「小学校との接続の在り方」が明示されました。また、小学校学習指導要領においても「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて指導を工夫することが示され、連携をより一層充実していくことが求められているところです。

また、幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会では、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるための重要な時期として、5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」と位置付け、幼保小の架け橋プログラムの実施がスタートしました。このプログラムは、子どもに関わる大人が立場の違いを越えて自分事として連携・協働し、架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育めるようにすることをめざすものです。

山口県でも、令和4年度から3年間「幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業」を受託し、架け橋期のカリキュラム開発に係る調査研究事業に取り組んできました。本県では、子どもの成長していく過程にならない、「保幼小」の文言を使用し、保幼小連携に関する取組として、カリキュラム開発会議及び架け橋期のコーディネーターの設置や連携推進のための研修会の開催等を行っております。

また、小学校の教員を保育所・幼稚園・認定こども園へ1年間派遣する長期研修を平成16年度から行っており、現在までに81名の教員を派遣し、本県における保幼小連携の推進に資する人材の育成に努めております。

本冊子は、調査研究事業の一環として、令和5年3月刊行リーフレット「つながる子どもの育ちと学び はじめのいっぽ ～保幼小連携、ここからはじめよう～」を基に、域内の園・所や小学校、市町教育委員会及び保育主管課等の実践事例を掲載し、保幼小連携に向けた取組の詳細が分かるよう作成いたしました。また、架け橋期のカリキュラム作成の参考となるよう、幼児教育・保育長期研修派遣教員が作成したカリキュラムも掲載しております。各園・所及び小学校、地域において、それぞれの特性を活かしながら連携を進めていかれる手立ての一つとして、是非御活用ください。

最後になりましたが、本冊子作成において、御指導いただいた周南公立大学人間健康科学部 准教授 金子 幸 様、山口大学教育学部 講師 青山 翔 様をはじめ、貴重な事例を御提供いただきましたワーキンググループの皆様、御指導いただきましたカリキュラム開発会議の委員の皆様、に、厚く御礼申し上げます。

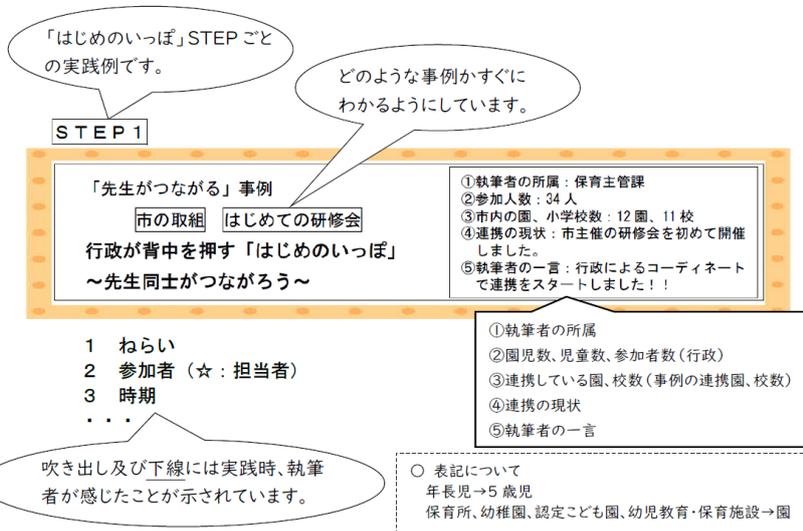
令和6年12月

山口県乳幼児の育ちと学び支援センター  
所長 田中 マキ子

# 目次

子どもの育ちと学びはつながっていく	・・・・・・・・・・	1
STEP 0 保幼小連携って？ Q & A	・・・・・・・・・・	3
「つながり」の充実に向けて	・・・・・・・・・・	5
STEP 1 先生がつながる Q & A	・・・・・・・・・・	7
実践例	・・・・・・・・・・	9
STEP 2 子どもがつながる Q & A	・・・・・・・・・・	15
実践例	・・・・・・・・・・	17
STEP 3 育ちと学びがつながる Q & A	・・・・・・・・・・	27
実践例	・・・・・・・・・・	29

## 実践例の見方



架け橋期のカリキュラムとは	・・・・・・・・・・	40
架け橋期のカリキュラム例	・・・・・・・・・・	41
引用・参考文献及び参考資料	・・・・・・・・・・	51

※ 乳幼児の育ちと学び支援センターWeb ページに  
 全面カラー版を掲載しております。



# 子どもの育ちと学びはつながっていく

子どもの育ちと  
学びのつながり

中学校以降

園

「生きる力」の基礎を培う

「生きる力」を育む

小学校

**経験**  
カリキュラム  
一人ひとりの生活や体験からの学び、自発的な活動を重視

5領域を総合的に展開  
(乳児保育は3つの視点)

**方向目標**  
「味わう」「感じる」等方向付けを重視

学びの芽生えの時期

**知識及び技能の基礎**

豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになる

子どもの思い

子どもの発言

水を入れすぎて崩れちゃった。(気づき)

びちゃびちゃして気持ちいい!(感覚・性質の発見)

坂にしたら流れるかな。(予想)

水が流れないからもっと掘ってみよう。(試行錯誤)

水をもっとゆっくり入れたらどうかな。(言葉による伝え合い)

気が付いたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする

少しよけたら一緒にいれるよ。(思いやり)

難しいけどやってみよう!(意欲・自信)

水を汲んで来てくれる間に、ぼくはこっちをもっと掘っておくね。(役割分担・協力)

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする

**思考力、判断力、表現力等の基礎**

**学びに向かう力、人間性等**

**知識及び技能**

何を理解しているか、何ができるか

よく見ると、葉っぱに小さな毛が生えているね。(詳細な気づき)

葉っぱが大きくなってつるも伸びてきたよ。(伝え合い・振り返り)

昨日学習したことが使えそうだね。(試す・見通す・工夫する)

他の考え方もありそうだね。(見付ける・比べる・例える)

学校の中には、部屋がたくさんあるね。(自ら働きかける)

もっと調べてみたい!(活動への意欲)

**思考力、判断力、表現力等**

理解していること・できることをどう使うか

どっちのやり方がいいか図で比べてみようよ。(図に表す)

**学びに向かう力、人間性等**

どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

**教科カリキュラム**  
学問の体系を重視

各教科等の学習内容を系統的に学ぶ

**到達目標**  
「~できるようになる」といった目標への到達度を重視

自覚的な学びの時期

遊びや生活を通して学ぶ

主体的・対話的で深い学びの実現

教科等を通して学ぶ

例えば 5歳児の「春の散歩」では…  
ねらい「春の草花や生き物などの自然に興味をもち、関わることを楽しむ。」

活動前

一緒に先を決めることで興味を膨らませようとする

野原と川沿い、どっちを通ろうか?

見守る見取る

どんなことを感じているのかな。どうして興味をもったのかな。

方法を考えたり、新たな発見や興味を深めたりできるようにする

〇〇ちゃんが見付けたこれは何だろうね?どうやったらわかるかな。

また行きたいね。今度はいつ行こうか?

遊びのつながりや次への期待がもてるようにする

何を持って行くといいかな?

必要な物を考え、活動の見通しがもてるようにする

面白いものを見付けたね。

子どもの発見や感情に共感し受け止める

春の草花に興味をもてるような声を掛ける

この前、シロツメクサがたくさん咲いていたよ。みんなと一緒に見に行きたいな。

子どもの発見を友達に広げる

〇〇ちゃんがこんなものを見付けたんだって。

発見したことや感じたことを伝え合う機会をもつ

素敵なものをたくさん見付けたね。みんなに伝えたい人いるかな?

活動中

活動後

それぞれの発達の段階により、方法等は違っても育てたい資質・能力やめざす学びはどちらも同じです。「違い」や「同じ」を知ることが大切です。

例えば 1年生生活科単元「はるをみつけよう」では…  
ねらい「春の自然を観察したり、遊んだりする活動を通して、春のよさや楽しさを体感できるようにする。」

活動前

経験を共有することで、季節への興味をもてるようにする

春について知っていることはある?春にどんなことをしている?

見守る見取る

どんなことを考え、何をしようとしているのかな。見守ってみよう。

振り返り

めあてをもとに振り返り、気づきを整理する

振り返りをするよ。春と友達になれたかな?どうしてそう思ったのかな?

もっと春を楽しんで、「春と友達になりたい」のだね。めあてができたね。

やりとりを通して子どもが自分たちでめあてをつくることで、単元への意欲を高める

みんなにみせてあげたいけど、大きすぎて持って帰れないね。どうしようか?

タブレットの活用方法に気付くことができるようにする

みんなの考えを聞いて、どうしたら春と友達になれると思う?

友達との比較を通して気づきが深まるようにする

めあてをイメージすることで、単元の見通しがもてるようにする

どうしたら春と友達になれるかな?どんなことがしたい?

遊びの発展や深化を促すようにする

同じ春でも色々な遊び方があるかもしれないね。

春のよさや楽しさを共有することで、生活を楽しくする方法に気付く

春と友達になると、どんな良いことや楽しいことがあるかな?

活動中

活動後

同じようで違う、  
違うようで同じ。  
だからこそ話し合う  
ことが大切です。

**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を話し合いの手掛かりに!**

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、幼児教育及び保育においてふさわしい生活や遊びを積み重ねることにより、育みたい資質・能力が育まれている具体的な姿です。到達すべき目標や個別に取り出されて指導されるものではないことに留意が必要です。

- 健康な心と体
- 自立心
- 協同性
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 社会生活との関わり
- 思考力の芽生え
- 自然との関わり・生命尊重
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- 言葉による伝え合い
- 豊かな感性と表現

詳しくはこちら!



**園の環境**

子どもたちは、園の環境の中で、遊びや生活などの経験を通してたくさんの力を伸ばしていきます。この根っこがあるから、子どもたちの「生きる力」が大きく伸びていくのです。

小学校に入学して、園で育んだ力をさらに伸ばしていこうとする子どもたち。子どもに関わる大人みんなで、子どもの育ちと学びをどうつないでいくのか話し合うことが大切です。

水をあげなければ枯れてしまう。あげすぎても枯れてしまう。花にもよる。適量はどのくらいか一緒に考えよう!

育ちと学びをつなぐことで、その子らしく「生きる力」を伸ばしていけるように!

# STEP 0

# 保幼小連携って？

山口県では、子どもの成長の過程にならって「保幼小」という文言を使用しています。文部科学省では「幼保小」を使用しています。

まずは「保幼小連携」に関する素朴な疑問について確認してみましょう。

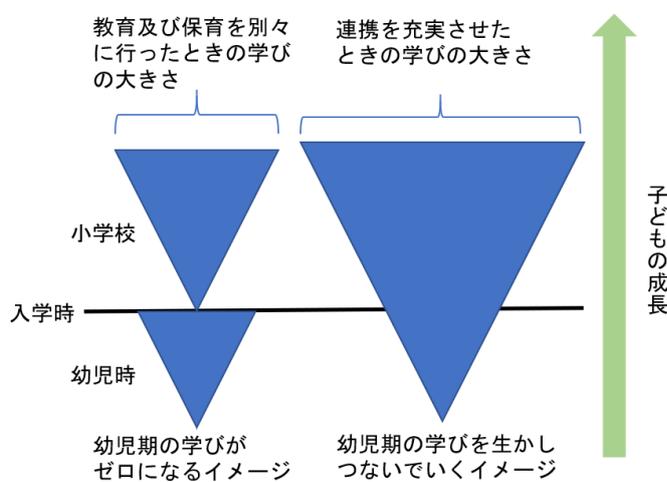


Q1 どうして「保幼小連携」が大切なのですか？

A1. 園と小学校が連携すると、子どもが安心感をもって園・学校生活を送ることができるようになるからです。子どもだけでなく、保護者も安心することができます。

安心感のある生活を基盤にして連携することにより、子どもの力を大きく伸ばすことができます。

右図のように、園と小学校が教育及び保育を別々に行っていると、小学校入学時点で、幼児期の学びはゼロになり、そこからまた学びをつくっていくことになります。一方、連携を充実させると、幼児期の学びを生かしつないでいくことができ、学びの積み重ねが期待できます。この2つの学びの大きさの違いは歴然です。このことは、幼児教育で育まれた資質・能力を小学校以降の教育で更に伸ばしていくことにつながります。一人ひとりの子どもの育ちや学びが途切れることのないよう、環境を整えていくことが重要です。

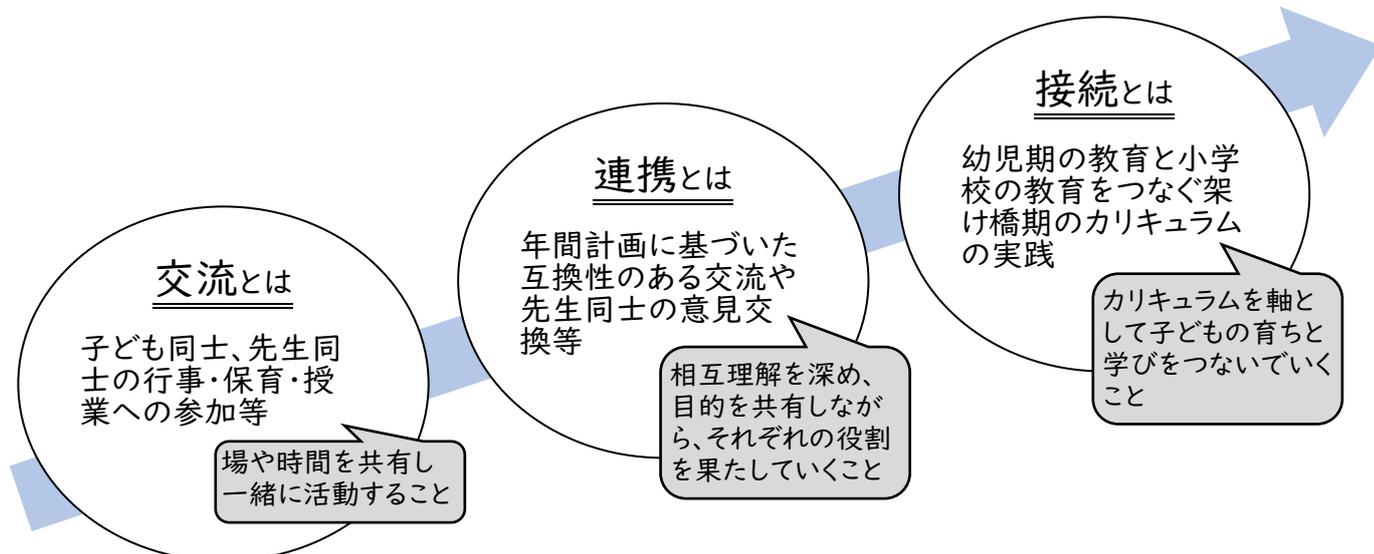


無藤隆「保育の学校」を基に作成



Q2 「交流」「連携」「接続」 同じような言葉ですが、それぞれの意味は？

A2. 「交流」から「連携」そして「接続」へ、取組が進むことをイメージして使い分けてみましょう。





「幼児期の教育を小学校教育に生かし学びをつなぐ」ためにはどうすればよいですか？

A3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を手掛かりにするとよいです。そして、園と小学校の先生が協働して架け橋期のカリキュラムを作成し、実践・検証・改善を行っていきます。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」をどのように活用したらよいですか？

A4. 園と小学校が子どもの育ちや学びを共有する際の共通言語として活用してみてください。園と小学校の先生が、子どもの育ちや学びの姿について話し合うときに、今ひとつ姿をイメージしにくいことがあります。その際、「『協同性』は…」のように、この姿を活用すると、園の先生は、子どもの育ちや学びの姿を分かりやすく伝えることができます。また、小学校の先生も同様に子どもの姿を受け取りやすくなります。まずは、合同での保育・授業参観等を通して、この姿を視点にして子どもの育ちや学びを見取り、話し合ってみてください。



「幼保小の架け橋プログラム」とは何ですか？

A5. 子どもに関わる大人が立場の違いを越えて自分事として連携・協働し、架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育むことができるようにすることをめざすものです。

小学校入学までに、何をしておいたらいいでしょうか？

そうですね…まずは長時間、椅子に座って、人の話が聞けるようにしてください。それから……

…よく聞く会話ですが…これは本当の意味での連携でしょうか？

5歳児担任

1年担任

保幼小連携というのは、小学校教育の知識・技能の先取りではありません。

保幼小連携アドバイザー

違いの例

園 環境を通した指導

小 教科書等を用いた指導

他にも、文化・習慣・意識…等ギャップはいろいろ

まずはお互いの違いや共通点を **相互理解!**

大人が協働して考える

「遊びを通して学ぶ」の発信と理解を!

これがまさに、アクティブ・ラーニング!

子どもの主体性や、学びの過程を大切に **授業づくり**

わくわくしながら遊んだり、生活したりするうちに、気が付いたら育っているのが、**遊びの中の学び**

どんな種をまいたの？

どのような場面で、どのように種をまいたの？

ぜひ!

架け橋期での子どもの情報の伝達・共有ができる連携を!

子どもたちを学校のために準備させるのではなく、学校が子どもたちのために準備することに焦点を当てよう。by.OECD(2017)Starting StrongV

「幼保小の架け橋プログラム」  
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」

詳しくはこちら→



※架け橋期…「経験を生かしながら新たな課題を発見し、新しい方法を考え試しながら実現していく5歳児」と「自分の好きなことや得意なことを生かしながら、学びや生活につながる力を育む1年生」の2年間のこと。(P27. STEP3の図参照)

「つながり」の充実に向けて  
～一人ひとりの子どもの育ちを支えていくために～

大切にしたいこと

- 「相互理解」  
互いのことを知る
- 「受容」  
互いを認め合い、  
よさを取り入れる
- 「協働」  
目的や目標に向け  
て一緒に取組を計  
画・実施・改善する

取り組んでみたい  
ことを考えましょう!!

現在、保幼小連携に関する取組を行  
っている園・小学校は多いです。自  
園・自校の現状をもとに、「つながり」  
をより充実させるために取り組んでみ  
たいことを考えましょう!!

- 先生同士のつながりを作りたい。
- 園・小学校それぞれのことを互いにもっと知りたい。

STEP 1  
P7~14

- 新しいことではなく、いつもの活動や行事を生かして交流したい。
- どちらの子どもにとっても学びのある交流をしたい。

STEP 2  
P15~26

- 園・小学校で子どもの姿を共有したい。
- 交流やカリキュラムを見直し、改善させたい。

STEP 3  
P27~39

「架け橋期のカリキュラム」の作成を進める過程で  
大切にしたいことを共通理解しよう!

語ろう!子どもたちのこと

実際の子どもたちの  
様子と一緒に見る機会  
をもちましょう!  
「幼児期の終わりまで  
に育ってほしい姿  
(10の姿)」を視点に  
話し合ひましょう!

共有しよう!めざす子ども像

子どもたちに関わ  
る大人でどんな子ど  
もを育てていこうとす  
るのか語り合ひ、共  
有しましょう!



真ん中に**対話**しよう

園と小学校が互い  
の教育内容、大切に  
している援助や支援を  
知ることが大切です!

園と小学校が共通  
の視点で話し合うこと  
で、援助・支援内容や  
その方法が具体的か  
つ系統的につながり  
ます!

知ろう!園のこと学校のこと

つなげよう!育みたい資質・能力

対話したことを、「架け橋期のカリキュラム」として可視化!

実践・検証

改善

	0歳~	5歳児	小学校1年生	小学校2年生~																					
共通の視点として 考えられる項目別	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
①期間とする単位数																									
②遊びや学びのプロセス																									
③園で展開される活動/小 学校の生活科を中心とし たる教科等の単元構成等																									
④子どもの 関わり																									
⑤園・小学校の 生活科に関する 領域の構成・小学校の 領域・単元等																									
⑥子どもの 学び																									
⑦子どもの 交流																									
⑧家庭や地域との 連携																									

詳しくはこちら



子どもの育ちと  
学びのつながり





## STEP 1

# 先生がつながる

子ども同士のつながりをつくるために、まずは先生がつながりましょう。



Q1 「先生がつながる」仕組みづくりのために、何から始めたらよいですか？

A1. 管理職のつながりがスタートになります。特に、小学校の校長が調整役となって進めてみてはどうでしょうか。園と小学校の管理職同士のつながりができたら、それぞれ連絡窓口となる担当（保幼小連携担当、園務・教務主任等）を決め、何ができるかを話す場を設定しましょう。まずは「お互いの顔が分かるつながり」をめざすことから始めませんか。

中学校区内にある園、小・中学校の管理職、担当校の教育委員会の指導主事が月1回、連絡会を行っている市町の事例もあります。



Q2 5歳児クラスや1年生の担任が進めるものですか？

A2. 連携の推進役は5歳児クラスや1年生の担任になることが多いですが、全教職員で推進していきましょう。いろいろな年齢・学年が交流することで、連携はみんなで推進するという意識が高まります。保幼小の先生が対話する機会が増えることで、それぞれの教育・保育の特性や先生方が大切にしていること、例えば、幼児教育・保育では「生活や体験を大切にする」「子ども一人ひとりを丁寧にみる」、小学校教育では「系統的に学ぶ」といったことを知ることができます。これは、それぞれの教育・保育の改善に生かすことができます。



Q3 園と学校では、なかなか時間が合いません。どのようにしたらよいですか？

A3. 日常的に交流できる体制づくりと様々なツールの活用を意識してみましょう。保幼小連携は時間調整が難しいです。まずは、人間関係づくりを大切に、教職員同士が積極的に日常的な交流を積み重ねましょう（参観や散歩など）。打合せも、時間が限られているので、電話やメール、オンライン会議システムなどを活用して効率よく行うとよいでしょう。また、交流活動を行う際には、年度末に計画し、次年度の行事予定に入れておくのも有効な一つです。



Q4 （離島やへき地など）小学校区内に園がなく、架け橋期（5歳児・1年生）に該当する園児・児童がいません。どのように取り組んだらよいですか？

A4. 地域の実情に合わせて取り組みましょう。架け橋期に該当する園児・児童が在籍していない場合でも、県や市町が主催する保幼小連携研修会や連絡協議会に参加することで、園と小学校の教職員がつながったり、連携に関する情報交換を行ったりすることができます。架け橋期の園児・児童が在籍するようになった時に、「いつでも・誰でも」進められる体制づくりをめざしましょう。



## 園だより・学校だよりの 活用法は？

A5. おたよりは連携推進の大きなツールです。互いに交換するだけでも、園、小学校がどのような取組をしているのかを知ることができるだけでなく、子ども同士の交流の始まりにもなります。

例えば、

- ①小学校で運動会があることを知る。
- ②小学生がかけっこをする姿を園児が見る。
- ③園の遊びの中でかけっこが広まる。

園児が校長室に「おたよりゆうびん」を届けている園もあります。

また、おたよりを共有する際、回覧以外にも、定位置にコーナーをつくる、目に付きやすいコピー機の前に掲示する等の工夫をするとより効果的です。



## 保育参観・授業参観では、どのような視点でどのような場面を見るとよいのでしょうか？

A6. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を視点にして参観すると、子どもの姿を共有しやすくなります。

保育では、自由遊びで遊び込んでいる場面、集団で何かに取り組んでいる場面などを見ると、園児の様々な姿を見取ることができ、理解につながります。給食（お弁当）、片付け、手洗いやトイレ指導なども小学校とのつながりが見えてよいです。

授業では、はじめは、保育内容とのつながりが見えやすい生活科、体育科、特別活動などの教科を参観場面として設定するとよいでしょう。

教科だけでなく、給食、掃除、朝・帰りの会といった生活場面の様子を参観するのもおすすめです。



# STEP 1

## 「先生がつながる」事例

市の取組 はじめての研修会

### 行政が背中を押す「はじめてのいっぽ」 ～先生同士がつながろう～

- ①執筆者の所属：保育主管課
- ②参加人数：34人
- ③市内の園、小学校数：12園、11校
- ④連携の現状：市主催の研修会を初めて開催しました。
- ⑤執筆者の一言：行政によるコーディネートで連携をスタートしました！！

## 1 ねらい

- 市内全ての園と小学校を対象とした保幼小連携の研修会を開催することにより、連携の必要性について共通認識をもち、各地域の実情に応じた連携の方法を考える。
- 市内全ての園と小学校の先生が集まり、他の園や学校で取り組んでいる好事例を参考にすることで、今後の連携に生かせるようにする。

## 2 参加者（☆：本実践の企画・運営担当者）

- 園（12園） 園長、5歳児クラス担任（計21人）
- 小学校（11校） 校長・教頭などの管理職及び1年生担任（計13人）
- 行政機関 教育委員会担当者、☆保育主管課担当者

## 3 時期

2学期の前半 午後の時間帯

園の先生方が集まりやすいとの意見があり、午後に開催しました！

## 4 内容・時間

### (1) 講義（90分）

乳幼児の育ちと学び支援センターの幼児教育アドバイザーによる保幼小連携に関する講義を通して、共通認識をもつ。

詳しくはこちら→



### (2) 事例紹介・グループワーク（70分）

市内を3地域に分け、主に園からの事例紹介をもとに協議・演習を行う。

### (3) 振り返り・質疑応答（15分）

事例紹介・グループワークにおける気付きや感想を整理し、今後の具体的な連携方法について相互に意見交換を行う。必要に応じて幼児教育アドバイザーから連携のヒントについて提案を受ける。

## 5 取組を充実させるためのポイント

- 市内全ての園と小学校から参加してもらえるように、教育委員会と保育主管課が一体となり、相互の調整を図りながら研修会を開催する。
- クラス担任だけではなく、園長や校長・教頭等の管理職にも参加を促すことで研修内容を園内、校内にもち帰り、保幼小連携の共通認識をもつことができるようにする。
- 校区の枠を超えたグループワークを行うことにより、日頃交流の少ない園や学校の事例を情報共有できるようにする。

校区シャッフル型で行うことにより、新たな視点に気付いたり、発想を広げたりすることができ、取組への刺激にもつながります！

## STEP 1

### 6 取組の実際

乳幼セのアドバイザー等訪問事業を活用することで、講義の調整がスムーズになります。

#### (1) 講義

乳幼児の育ちと学び支援センターの幼児教育アドバイザーから「保幼小連携で大切なこと」をテーマとし、取組の現状や連携を行う際の課題解決の方策などについて講義を受けました。園と小学校との知識・認識・文化のギャップを埋める工夫が必要であり、何よりも子どもを主体として考え、連携に取り組むことが重要であることを再認識できました。子どもを主体とした連携を進めるためには、「子どもが不思議に思ったことに共感する」「学ぶことが楽しいと思える心を育む」といった視点をもつことが重要であると改めて実感することができました。

#### (2) 事例紹介・グループワーク

園からは、「興味のある遊びを通して育っている力」について、取組内容の紹介がありました。ある園の事例では、ヘビに興味をもった子どもがおり、そこから「世界にはどんなヘビがいるの?」「ヘビの長さはどのくらい?」といった疑問が生まれ、実際にみんなて種類を調べたり、長さを再現したりすることで、協同性や数量への興味関心につながったことが紹介されました。小学校の先生からは、「園での遊びが算数科や理科など、小学校での様々な学習につながっていることが改めて実感できた。」との声が挙がっていました。



小学校の先生に、取組の様子が分かる写真を実際に見てもらうことにより、園の「ねらい」を理解してもらうことにもつながりました。

#### (3) 振り返り・質疑応答

事例紹介での小学校の先生からの反応を受け、園の先生からは、「小学校での授業の様子を実際に見て、今まで以上に連携を意識して取り組みたい。」といった意見が出ました。市内全ての園と小学校の先生が集まることで、顔の見える関係ができて、お互いの距離が縮まり、今後の具体的な連携に向けての土台となりました。

また、幼児教育アドバイザーから「就学後に小学校と卒業した園とを柔軟に行き来できるような環境を整備するなど、小規模な自治体だからこそできる新しい連携の在り方を考えてもよいのでは?」との提案もありました。これまでの形にとらわれずそれぞれの地域の実情に合った、新しい連携の在り方を考えるきっかけにもなりました。



研修後に実施したアンケートには、園の先生からは、「小学校との距離が近くなり連携が取りやすくなった。」、小学校の先生からは、「保幼小の連携がスムーズに進むように、行事や生活科などの学習を通じて一緒に活動するなど子ども同士の関わりをもてるようにしたい。」などの意見があり、今後は、より具体的で継続性のある連携への取組が必要であると感じました。

来年度以降は、カリキュラムの作成や小学校からの園訪問などを進める予定です。

## STEP 1

「先生がつながる」事例

気軽に いつでも

見て、来て、感じて、つながろう

- ①執筆者の所属：保育所
- ②園児数：150人
- ③連携校数：1校
- ④連携の現状：年数回交流しています。
- ⑤執筆者の一言：垣根を低くして、交流できる機会を作るにより、連携しやすい関係が構築できます。

### 1 ねらい

- 子どもたちが園でどのような生活を送っているのかを直接見るにより、幼児期の育ちや保育についての理解を深める。
- 先生同士が直接語り合うことにより、顔の見えるつながりをつくり、子どもの育ちを共有するとともに、なんでも聞き合える関係づくりを行う。

### 2 参加者（☆：本実践の企画・運営担当者）

園

所長、☆主任保育士

校長、教頭（2人）、1年生担任（5人）  
他学年の担任や特別支援学級の担任等（4人）

小学校

### 3 時期

小学校の夏休み期間

日程に幅をもたせると、小学校の先生の参加率が高まります。

### 4 内容・時間

- 参加者の都合に合わせて、順次見学を行う。（目安の時間 10:00～12:00の間）
- 園内を所長や主任が案内しながら、園の様子を紹介する。
- 見学だけでなく、保育に参加することも可能。

一方的に話すのではなく、対話型で説明すると小学校の先生から質問が出やすくなります。

### 5 取組を充実させるためのポイント

- 連絡会等の既存の機会を生かして、管理職が意思の疎通を図り、土台づくりをしておく、その後の活動の計画が立てやすく、スムーズに準備を進めることができる。
- 小学校の先生が参加しやすいように、時間や日にちにゆとりをもたせる。
- 形式にこだわらずに垣根を低くし、互いの情報を伝え合うことに焦点を当てる。
- 参加者が見たいところに行き、聞きたいことを聞き、知りたいことを知ることができるように、ウェルカムな雰囲気づくりを行う。

保育に直接参加したくなる機会や雰囲気づくりをすると、小学校の先生が子どもや園の先生の思いを理解しやすくなります。

## STEP 1

### 6 取組の実際

#### (1) 打合せ

6月中旬に本市が行っている保幼小連携ブロック連絡協議会があり、その中で校區別連絡会がありました。コロナ禍で途絶えてしまっている交流の在り方などを検討し、今年度から行えそうな内容を挙げていきました。内容は、「授業参観&前年度担当との連絡会」「運動会や音楽会のリハーサル見学」「養護教諭や栄養教諭の話を聞く機会」「5歳児が1年生の授業見学」等です。またその中で、子どもたちの園での生活を小学校の先生方に知っていただく機会をもつように提案し、双方で調整を行うことを決めました。その後、7月中旬、園より見学可能な日を伝え、小学校側で調整を図りました。

#### (2) 園見学

園での保育の様子分かる「ドキュメンテーション」や0歳児からの「10の姿のつながり」、「園舎内の配置図」等の資料を用意し、当日に紙媒体として情報を提供しました。見学時は所長と主任が各年齢の保育室を紹介しました。また、子育て支援センターも併設しているため、地域との連携についても説明を行いました。特に5歳児クラスの様子を見学することができるように時間配分を考えました。

子どもたちの様子を伝える中で、保育や小学校教育の大変さ（特に保護者対応や、個別対応が必要な子どもへの配慮等）など互いの業務内容の見えない部分を共感し合うことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

園生活でいろいろな経験をしていることを実感していただき、この経験をつなげていけるようにしていきたいとの感想も聞くことができ、嬉しく思いました。

#### (3) 振り返り

小学校から12名の先生方が参加していただき、保育に対する理解が深まったとの声を聞いたことは大変有意義でした。また直接子どもの様子や環境を見て、疑問点を確認したり、共通点を認識し合ったりすることにより、参加者同士、顔の見えるつながりがはっきりできたと思います。

しかし、遊びが中心の幼児教育と授業が中心の学校教育をつなぐ10の姿を共有することの難しさを感じました。

今後はさらにつながりを深めていくことができるように、グループを作って意見を交換したり、オンラインフォームなどを使ったアンケート形式で、見取った10の姿や感じたこと等を記入したりして、互いの視点を知ることができるとさらに連携が深まっていくのではないかと感じました。



## STEP 1

### 「先生がつながる」事例

校内研修 授業参観

### 学び合おう！「保幼小連携」について

- ①執筆者の所属：小学校
- ②児童数：641人
- ③連携園数：4園
- ④連携の現状：年2回の合同研修会と授業参観を行っています。
- ⑤執筆者の一言：保幼小の先生が対話することで互いの教育及び保育をつなぐことができます。

#### 1 ねらい

- 校区内の園と小学校の先生が直接顔を合わせ、対話をする場を設けることで、互いの教育及び保育について共通理解を図る。
- 小学校1年生の様子を知ったり、就学前の学びや育ちを共有したりすることで、子どもの心身の成長の過程について理解を深める。

#### 2 参加者（☆：本実践の企画・運営担当者）

園

校区内保育所・幼稚園・認定こども園園長  
クラス担任、クラス担任補助（計15人）

校長・教頭、教諭、養護教諭  
☆保幼小連携の担当者（計35人）

小学校

#### 3 時期

1学期から2学期にかけて

保幼小の先生が集まる機会を作ることが  
大切です！

#### 4 内容・時間

##### (1)1学期【5月】(90分)

園と小学校の先生が一緒に研修を行い、保幼小連携についての実践を紹介し合い、意見交流する中で、互いが顔見知りになる。

##### (2)小学校の夏休み(90分)

「入学から学校生活に慣れるまでの1年生の生活」について担任が話すことで、校区内の園の先生と小学校の先生が1年生の入学当初の学校生活の様子について共通理解を図る。

##### (3)2学期【10月】(90分)

授業参観を通して、実際に園での学びが小学校での教育にどのように生かされているのかを考え、協議する。

#### 5 取組を充実させるためのポイント

- 小学校区内に多数の園がある場合は、小学校側から「校内研修」への参加呼び掛けなどの発信があると集まりやすくなる。互いが顔見知りになった後、さらに研修内容を保幼小で検討したり、年度によっては研修の在り方を変えたりする（園側の話を聞く）などの方法を探っていくといい。
- 小学校の授業を参観する機会をもつことで、園の先生に子どもの成長を感じてもらおうとともに、園での学びがどのように小学校の教育に生かされているのか協議しながら理解を深めていく。

授業参観後に協議することで、お互いの教育及び保育について理解を深めることができます。

## STEP 1

### 6 取組の実際

#### (1) 校内研修への参加

小学校は、全教職員が参加し、校区内の園の先生方は、園長や 5 歳児クラス担任を中心にできる範囲で参加しました。小学校は、1 年生担任を多く経験した先生もいれば、全く経験のない先生もいます。その中で、誰もが 1 年生を担当した時に、今までの子どもの成長をつなげられるように園での学びを知ることや、どのように保幼小が連携していかなければならないのか考える機会をもつことが大切です。そこで、保幼小連携担当の先生が、実践を発表する研修を行いました。



発表後は、小グループで園と小学校の先生と一緒に話をする機会を設け、日頃の悩みや、子どもの様子などを語り合うことで、先生がつながることができました。保幼小連携についての実践発表が難しいようであれば、1 回目の時に「入学してからの生活について」、2 回目に「幼児期の遊びを生かした授業について」など内容を変えながら行うこともできると思いました。

#### (2) 小学校入学から学校生活に慣れるまでの 1 年生の生活について

園の先生は、入学してから子どもたちがどのように過ごしているのか、知る機会がありません。入学してから学校生活に慣れるまでの様子を、スタートカリキュラムに基づいて、1 年生担任に話をしてもらい、その話を踏まえて小グループで意見交流しました。そこでは、小学校での課題や、園との環境の違いからくる子どもの困り感について共有したり、話をする中で互いの考えを知ったりすることなどができ、今後の取組について考えるきっかけとなりました。

#### (3) 授業参観・協議

2 学期には、国語科の授業を参観して、授業後に協議を行いました。「くじらぐも」の物語文の学習で、くじらぐもに乗って空を旅する中、どこに行くかや、何が見えたかを想像しました。「町ってどんなところ？言葉で説明できる？」という発問に、「家がいっぱいあるところ。」「電車が通っているところ。」など、町について子どもなりに考えたことを説明し、みんなが同じイメージをもつことができていました。園でも振り返りなどを言葉で説明する機会がたくさんあります。自分の思いを言葉で表現する難しさが協議でも話題となりました。参観するだけでなく、協議も行うことで、今の子どもたちの課題について共通点が見えてくると感じました。

今回は授業参観をしましたが、小学校の先生が園に保育参観に行くなど、互いに行き来し、先生同士の交流が増えてくると、子どもの成長の過程の理解も深まってくると思いました。

くじらぐもの授業



授業後の協議

